

社会運動としての連合再生を

「組合が変わる、社会を変える」へ地域強化も急務

前連合会長 笹森清さんに聞く

聞き手 小林良暢

グローバル総研所長

—今日は三つのことをお伺いしたい。一つは連合の結成に至る過程で戦線統一の愚子役であった時代のこと。次いで、連合運動で、事務局長・会長として何をしようとして、何を実践したのか。さらに、会長を退いた後、広い分野で活動をされている、そのあたりにこれからの労働組合運動の再生のヒントがあるのではないかと、この三点です。

最初は、「全民労働運動史」という本の中で笹森さんは「この四年間が私の財産であった」と書かれている。どんな思いで全民労働運動（全国民間労働組合協議会、民間四一産別・四二五万人が参加）の事務局の中に入っていったか、それが一つの原点かとも思いますが。

● 1 連合への前史―全民労働の頃

山田精吾船長に大衆運動を学んだ／全労働の四年間は私の財産

● 2 連合結成から運動の表舞台へ

地域運動組織なきスタート、今も大きな課題／連合政治方針の確定に参画／九七年、事務局長に「忘れたものを思い出そう」／「連合21世紀ビジョン」から「連合評価委員会提言」へ

● 3 連合「チェンジ」の要は社会運動としての再生

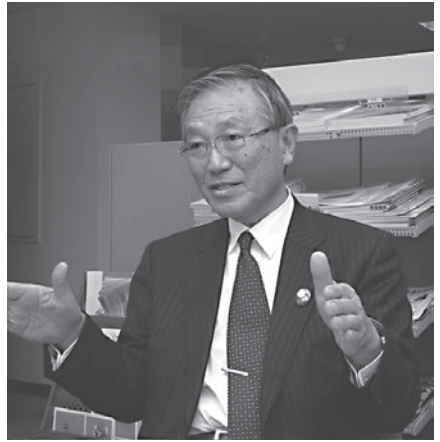
地域組織の再生と地域運動の活性化／年越し派遣村は社会運動の原点／派遣法はやはり「原則自由化」の前に一度戻すべき

1

連合への前史―全民労働の頃

笹森●ええ、本当におもしろい仲間だった。やっぱり、山田船長（精吾・事務局長）がおられたから成り立つたんだろうと思う。言ってみれば井の中の蛙が初めて大きな海に出た、という印象が強烈に強い。まあ、カルチャーショックだった。これが労働運動だと、初めて経験した。

というのは、今もそうだけど、日本独特の企業別労働組合があつて、産業別組織があつて、ナショナルセンターが



さざもり・きよし

1940年東京都生まれ。60年東京電力入社。82年全日本民間労働組合協議会事務局長。86年東京電力労組書記長、委員長を経て94年電力総連会長・日本労働組合総連合会(連合)副会長。97年連合事務局長、2001年連合会長に就任。2005年より労働者福祉中央協議会(中央労福協)会長を務める。

ある、大きくは三階建てになっている。ほとんどの労働組合の役員の人たちは、企業別労働組合の中で終わるんです。企業別労働組合の中でやっていることは、メンバーシップ制、まあちよつと拡げても組合員とその家族と周辺地域、という運動なんですよ。これが産業別組織に出てくると、それを超えてくる部分がありますが、まだ同一産業の中ですが、政策実現のための運動などがあり、いわば組合活動から労働組合運動にはなりますが、そこまでが大体の人の限界なんですよね。

そこから上、ナショナルセンターはというと、これは社会運動をやるところなのですよ。

私の場合は東京電力労組のいわゆる組合活動の中にしかなかった。たまたま先輩がもつと広い運動をさせようとの思いで、電力労連に送り出してくれた。その電力労連は、全民労協に送るための腰掛けだったので、電力労連に八二年の一〇月に行つて、一二月に全民労協に送られるという、これはもうそこに行けや、という路線だったのです。

山田精吾船長に大衆運動を学んだ

——全民労協結成は一九八二年二月一四日、四十七士の討ち入りの日でしたね。

笹森●労働四団体の中に討ち入りしようという思いで選んだ日程だと、山田さんは言っていました。戦後の労働組合が世の中にきわめて大きな影響力を持っていた時代は約五〇%の組織率を持っていた。残念ながらすぐイデオロギー闘争になって、分裂分散の歴史で組織率もだんだん下がると。一時二五%、いわゆる四分の一程度の組織率、その四分の一をさらに四分割して、総評がなんだ、同盟がなんだといつても、影響力を行使できない。

ということから、働く人の政策実現へナショナルセンターは一つにしようと、これをずっと繰り返してきたのだが、そのたびに挫折をしてきた。大きくいうと政治路線が

最大のネックになっていて、とくに官公労働者と民間労働者との立場の違いがあるので、それならば、民間だけままとしたらどうだ、それも政策要求を実現するために、という限定をしようかと、これが一九七六年に作った政策推進労組会議です。この下地があつたので、全民労協を結成して、たつた二週間後に中曽根総理に要請に行つた。

下地がなかったら、多分不可能だったでしょうね。ところが、政策推進労組会議の時に政府交渉なり、各省庁交渉なり、従来の労働組合のやつていなかった政権側の与党に対する政策要請もおこなつた実績があるんですね。これが非常に効果的だった。というのは、それまでは五五年体制の中の社会党、そして分裂した民社党、この二つを通じて労働組合は要請をし、それが間接的に国会の中で取り上げられて、時差をおいて実現されてきた。

これじゃ遅いんだ。直接与党とやってみようかということとで、これを受けたのが自民党のサラリーマン議員連盟（橋本龍太郎会長）だった。サラリーマンに直結する通勤交通費の非課税限度額のアップ、深夜食の夜食手当補助改訂を要請した。持つて行つたら、サラリーマンをしていい橋本さん達分かるわけよね。「これやろうよ」ということになった。ところが、野党にも話を通さなければ具合が悪いものだから、野党にももつていく。「野党から来たも

のじゃ、ちよつと削れ」となつて、やるけれども削らなきやならなくなつた、というバカなこともあつたが、政策実現は直接やつた方が話は伝わりやすい。働く人の政策を実現するためには、いかなる政権、いかなる政党とも政策を通じて是々非々で対応する、これが、今の連合の政策要求の基本になつている。

このやり方は、当時の既存の労働四団体には、シヨックだったようだ、本気かと。そして、その勢いが春闘にまで及んだ、四団体プラス全民労協という形になるんだから。この全民労協が、春闘だとか政策要請だとかを一緒にやりましたよとなり、重層的になるので厚みがある。すさまじい波及効果を持つていた。

全労協の四年間は私の財産

——でも、全民労協の事務局は一〇人そこそこの小世帯でしたな。

笹森● 全民労協は人数は少なく、最初は山田事務局長以下八人だった。書記局もない。その中で、全省庁に対応するんですよ。今だったら年金担当をやりなさい、税制とか医療とか、一個持てば良いんだけど、当時は省庁をまたぐんですよ。おまえのメインは労働省だけでも、大蔵省と外務省もカバーしなさい、とかね。これをやるもんだから、ものすごく勉強するわけですよ。

——しかも政策は手作りでしたからね。産別の政策スタッフも動員されましたが、やっぱり事務局が一つずつ政策を作った。

笹森●全部手作り。これはね、勉強しなければできない。その代わり、かなり乱暴な部分もあって全部に認知されていたわけじゃない。だから行き過ぎると鬼つ子扱いされたこともあった(笑)。

この四年間の実績が次の民間連合になり、民間連合の中でちよつと幅を拡げた運動をやつて、八九年の連合に結びつく。いろんな思い出があります。まあ、メチャメチャにやつていたけれど、自分たちのジャンルじゃない人たちと知り合う。マスコミ、役所、政治家そして政府そのもの。ここの関係を事務局員が直接やるわけです。これは得難い経験だったね。人を知ること、組織を知ること、いろんな仕組みを知ること、これがいかなれば私の財産ということになります。

——全民労協といえば政策要求の実現ということですが、私の印象では集会とか動員がえらく多かったです。四団体があつたのに、それ以上に何でこんなに多いんだ、と思うくらいだった。これは、やっぱり山田さんが、根っからの大衆運動家だからですか。

笹森●そう大衆運動家。これがね、企業別の中にいた連中には脅威だった。今も私は現場で集会をやったりデモをやるのに率先していくようになったけれど、これは山田さん

の影響が下地になって、それは私の原点です。

それでね、みんな慣れてない。ところが、山田さんは減税闘争の時に毎日、毎日、財務省と国会に出かけて、集会をやれ、人数は多くなくて良いんだ、と言う。当時の主力産別に毎日割り当てをするわけだね。だから三〇人の時もあれば、五〇人、一〇〇人の時もある。ところが事務局は毎日現地に行つて、集会で司会をやり内容説明、シユブレヒコールやり街宣車にも乗る、というのを毎日やる。いやでも訓練される。結果的に減税というものは全民労協がやった、という評価につながるわけですね。

それから民間だけではあつたが、国の基本政策に関わる部分を本音でできた。例えば私が担当した原子力政策。初めはね、書かない、触れない、しゃべらない、非核三原則。一つでも「げ」の字を言ったらすぐパンクでね。ところが、これでエネルギー政策を持つて行つたら、役所はバカにする。それでどうするか、という論議をしていったわけ。やつと三年目で初めて今のエネルギー政策、原子力政策の基本の三行ができる。この三行を入れ込むだけで三年かかる。しかし、そのことは本音でやり合つたからできた。ほかの政策でも全部そうです。これができた全民労協というのは、私はすごかつたなあと思う。動かしたのは、山田さんの情熱ですよ。

連合結成から運動の表舞台へ

——笹森さんは全労協の事務局次長を二期四年努めました。その後一九八七年の民間連合を経て、八九年十一月に連合の結成。連合結成の時は笹森さんはどちらに？ またその意味は。

笹森●私は単組の、東京電力労働組合の書記長です。新宿の厚生年金会館には、傍聴で行っていました。これはもう、感慨無量だよ。やっと出来たかと。全労協から民間連合、そして連合ができた。

官民統一が早かったのか遅かったのか、の論議がありました。私自身は、官民統一でスタートして良かったと思う。というのはいね、民間だけで行っていたら、おそらくまだ官と一緒になかったのでは。そうすると、官は行政改革、公務員制度の見直しとかの今日、完全に孤立化していたでしょうね。

我々の仲間と一緒にやった人たちの中にも、早いという人もいれば、やっぱりいくべきだという人もいて、完全に分かれてた。しかしね、官民統一でなかったら、ナショナルセンター、連合とはいい切れない、というのが私の意見です。その上で、非常にタイミングが良かった。これはね、日本も世界もちょうど時代の転換点だった。これはまさに昭和から平成に変わる。天安門事件があった。そし

て、連合が結成される約一〇日前にベルリンの壁が壊れた。世界的に、いくなればパラダイムの転換のスタートが切られた。その時に連合結成。世界に発信したんだよ。これで日本の労働運動は大丈夫だよ。

——私現場にいなかった。電機連合の中執になっていましたから、当然代議員になるはずだった。ところが、その日に九州の方である組合が産別加盟の機関決定をするというので、本部から誰が行かなきゃいけない。企業連から来ている役員は連合大会に参加して報告をするので、「小林なら実家がないから良いだろう。おまえ九州に行け」。

笹森●それは残念だったなあ。歴史的な瞬間ですよ。あそこに行ってみてれば、「これで日本の労働運動は世界の中で本当の主力になれて、日本の働く人達にとってきわめて強いナショナルセンターが生まれたなあ」。そういう感慨、思いを持たしてくれたのは事実です。

地域運動組織なきスタート、今も大きな課題

——一つ笹森さんにお伺いしたいのは、あのとき、あるいは後によく言われる、地域組織の未整備という状態でスタートせざるを得なかった。「片肺飛行」と言われたのですが、その点については。

笹森●これがねえ、今、組織を本気で見直した場合、四七都道府県と連合中央との関係はどうしていくか、作り替えなきゃいけない。近々、多分組上に載るでしょう。当時

は、一つタテの関係にはしないというのがあって、産別加盟を原則とする、そうすると人事権も実際の行動も規制強化できない。一番やらなきゃならないのは地域の中で組織拡大をすること。どう地域を活性化させるかが未整備だったことが、連合の足腰を弱くしたことは事実です。ただし、地方連合の活動に救われていた。指令をしない、強制もしなくても、自主的にそれぞれの県独自の運動を展開してくれた、連合にとつてはものすごく助かった。

なぜ作らなかったのか、これは総評の地区労、総評の地方オルグ、これの弊害に同盟系が、あるいは総評の中でもかなり危機感を持っていて、そつくりそのまま連合に移行するのは無意味だろう、そういうことのないように土壌から作り替えた上で地方組織と連合との関わりを整理しようとして、やっぱりあって良かったなあ、というのもないわけじゃないが、あの段階では弊害の方が強かった、と思います。

——私は山田さんと、短い期間ですが連合総研で一緒にしました。ある時、「小林君、民間連合をやっている間に、もっと地方組織をちゃんとしたかったんだ。民間連合は二期二年で終わってたが、あと一期あればなあ」ということをチャットとおっしゃっていた。これを聞いて、山田さんは、一旦地方組織をああいう形態にしたけれども、一番そこに頭がいていた、大衆運動家として。

笹森●もうこれはねえ、地域組織がないナショナルセンター

というのは運動体になりませんから、これは山田さんにさんざん言われたことがある。だから僕は、最後に退く時に地協の充実強化を打ち出すわけです。ただ、そうしていいなくてもがんばってくれたことは事実です。だから僕は、地方連合というのは評価しています。

——連合結成大会に参加されて、それから何年後ですか、笹森さんがいよいよ連合に出てくる羽目になったのは。

笹森●ちょうど四年後ですね。会長はまだ山岸(章)さんが山田さんは事務局長を降りた。結成の時の連合スローガンが「平和・幸せ・道開く」。見事なスローガンだと思いますよ。これは、連合が求めたいことが完璧に入っていたね。それをどうやるかの二〇年間であつたけれど、残念ながら、平和・幸せ・道開いてない。まあ自分も事務局長、会長をやり忸怩たるものがあるが、じゃあそれをどうやっていくのか二〇年を契機に切り替えなきゃならない。

連合政治方針の確定に参画

連合に関わった時、ちょうど政治方針が確定する時でした。四団体時代、分裂分散の歴史の繰り返し、統一しなればならない、それがすぐ挫折する、何だったんだろう。それは政治路線、政党支持問題ね。全民労協、民間連合、連合と来たんだけど、この問題を横に置いてきたわけだ。

横に置いたのはもう一つ。国の基本政策。しかし連合は結成された。これが一つにまとまって発信できない様な連合では、ナショナルセンターの力を発揮できない、ということ。四年間かけて山岸会長、山田事務局長の下で、政治委員会の論議を重ねた。この政治委員会の初代が得本（輝人）さん。私が出て行く直前の九三年六月の中央委員会です。この政治方針の基本は、自民党に変わる政権交代可能勢力を作る、究極的には二大政党的体制を目指す。そして政党・政治家との関わりは、連合の掲げる政策および制度・要求と一致する政党・政治家と支持協力関係を結ぶ、と打ち出したのです。その翌月に、自民党に変わる政権（細川政権）ができた。自民党が下野しちゃった。それで一〇月の大会でこの政治方針が確定するわけです。ところが細川政権八ヶ月、羽田政権二ヶ月でポシヤるわけです。

——その後に、自社さ政権というおかしな政権ができて……。

笹森●僕が二代目の政治委員長をやる。九〇年代に入つて政治改革が声高に叫ばれて、その集大成が九三年の選挙で、この時に日本の政治の図式が五〇年間の中で大きく変わるんだよね。何といっても、一時をのぞいて自民党一党政権で日本は来た。ところが、組み合わせが違うが九三年以降は連立政権の時代になった。それに対して連合は政治対応をきっちり作れているかというとな、まだウーンとい

う感じていた。ただし、目標とする政権交代可能な二大政党的体制が望ましいというところまでは来てる。本当にいけるかどうかは、今年の総選挙になると思うけれども。徐々にその政治方針に基づいて向かってきた。

しかしこの時に、最初の四年間論議したけれども、結局国の基本政策についてはまとまらなかった。政治方針についても、一応自民党に替わる政権を作るでは一致したけれども、それまでの関わりを持ってきた政党との関係を整理しきれずに、お互いに理解し合うということでも薄めたわけだ。細川政権から自・社・さ政権になって、つまり全部政権与党に入っていたり、又裂きで片足だけでも政権与党に入っていたり、その時に連合の掲げる政策の実現度合いはどうだったか、というとな変わらないんです。逆に言うとな、要求を自制するのですよ。

——自制するというのは……

笹森●我々の作った政権じゃないかと言って、だからあれも呑め、これも呑めとはやらない。ここが日本の労働組合のすばらしいところだと思ふ。だから、連合が応援する民主党は労働組合の言いなりになっている、という批判をうけるけれども、現実はそのようではないんです。この歴史的教訓として学習効果が、本当に今年の選挙が政権交代に結びつき、支持する政党が政権第一党になった時に、政策との

関わり、その関わり方の距離の近き遠きをどう整理するかというのは、連合の今後の良心だな、と思うところがあ
ります。それで、地域運動については、そういう中で政治
活動を中心に一つは行われた。

もう一つ、政策実現行動の中のエポックがありました。
何かというと減税闘争です。この減税闘争は、小淵内閣の
時に実現するのです。これが九七年、連合結成八年目。こ
の恒久減税は、法人税と所得税の恒久的減税（後で結局恒
久じゃなかったのだが）。これは画期的なことです。全民
労協時代、さらに連合結成されて八年間、減税減税とず
うつと要求してきたことが、初めて恒久的制度として確立
した。何もないよ、とかいろんなことを言う人がいるけれ
ど、あるのです、現実よね。

九七年、事務局長に”忘れたものを思い出そう“

笹森●九七年、連合結成八年目に事務局長になりましたが、
私が山田さんに教わったことで、何をやろうとしたのか。
この時に私が掲げたのは、”労働運動として忘れてしまっ
たものを思い出さないと取り返しをつかないことになる、
それは闘う“ということなんですよ。

この頃、バブルがはじめてデフレ不況の下、失われた一
〇年、一五年に突入していた。経済闘争はかばかしくな

くなる。就任して初めての九八春闘の時は、それでもま
だ、エイヤで決めた一万五〇〇〇円要求だったんだよ。も
しろんこれは、定昇+ベア+生活維持（物価上昇）分、いわ
ゆる当時の三点セットの要求ですが、一万五〇〇〇円要求
できて、一万円ぐらいの解決になった。これがあつという
間に崩れた。ベアすら要求できないという時代になった。

この一番の理由は失業率なんです。というのは、九五年
までは日本の失業率は三%を超えなかったことがないんですよ。
一・五%がデッドラインだった。これが、憲法でうたわれ
ている完全雇用なんだ。それを労使と政治も守ろうとして
いた、守れていた。ところが九六年以降、橋本さんの財政
構造改革、小泉さんの構造改革と移ってくる、いわゆる改
革路線の中で、三年に一ポイントずつ悪化してきた。

二〇〇一年の八月、私が会長に就任する直前に、初めて
五%になった。これは由々しき数字です。という流れの中
で経済闘争はかばかしくない、そして約五〇年経った日
本の労働運動に対し、いろんな人たちが組合無用論が出
てくる。連合の姿が見えない、労働運動の求心力がない、
労働組合なんていらんないじゃないか、とね。しかし、そう
なんだろうか。

僕は今いろんなことに関わる中で、労働組合が社会的影
響力を持っていたことを、一つだけ事実として述べたい。

今ヒットしている映画に「Always 三丁目の夕日」があるよね。あれは東京タワーのできる頃の話で、ものすごく優しい家族愛と、そしてその家族を取り巻く温かい、地域の人たちの絆が映っている映画です。これはもう、本当にそのような社会を取り戻したいと思うのです。

その時代、昭和三〇年代に実際に大ヒットした映画がある。それは吉永小百合さん主演の「キューポラのある町」だ。この映画の一場面で、鋳物工場が倒産して、お父さんが失業して、中学から高校受験と思っていたんだけど、進学をあきらめる。その彼女にお母さんが「おまえ本当に就職で良いの?」。そこで吉永さんが「学校の先生がおもしろいこと言うんだよね。一人の五歩より、五人の一步と言うんだよ」と言うせりふがある。この「一人の五歩より、五人の一步」というのは、監督や脚本家が考えたせりふじゃないんだよ。誰だと思いません、当時の国労が掲げたスローガンなんです。労働組合が掲げたスローガンを、一番大事な場面で、アイドル中のアイドルの子にしゃべらせるのですよ。

その子があきらめて就職することになり、工場見学に行く。日立武蔵ですよ。昼休みのサイレンが鳴り、女子工員たちが出てきます。リーダーが「みんな集まって」とコーラスの練習に入る。歌声運動をリードしているのは組合の

女子リーダー。電機連合、日教組、国労。そしてそのお父さんが、今度は組合の幹旋で再開された鋳物工場に再就職できるんだ。これをやったのは全金同盟。全部出てくるわけ。

何をいいたいかと言うと、一番ヒットした映画を見ている国民が、何の違和感もなくそうだ、と思うくらい労働組合や労働運動が心の中に入り込んでいたということ。そういう影響力があつたわけですよ。ところが、ものすごい高度成長時代の中で、あぐらをかきすぎた。そういうことを忘れてしまつて、あぐらをかいた上で、のほほんとしていると、取り返しのつかないことになるぞ、と。だから思い出さないと大変なことになるぞ、ということを経理局長になつたとたんと言つたのです。

その上で、そう思われている労働運動を再生、活性化させなきゃいけない。これが僕の事務局長四年、会長四年の、自分に課した最大の至上命題でした。

何をやったか。これは山田さんが言われた「目線は現場に」なんです。みんな言うじゃない、「労働運動の原点は職場にあり」って。ところが、上がつてくるたびに遠くなるんだよ。現実にはずれ始めた、ということに気が付かなくちゃダメなんだ。つまり、現実をどう見て取っているかを常に現場にフィードバックして自分も行きながら現場型の運動に変えていく。そういう影響力を持っていた労働運動

が仮になくなってきているのなら、それを取り戻して、再生・活性化をさせることが、働く人達や日本社会にとつて必要なことではないですか、という思いが、できたかどうかは別にして、自分の運動の原点です。これは山田イズムなんですよ。

「連合21世紀ビジョン」から「連合評価委員会提言」へ

笹森●それで事務局長になって最初にやったのは、労働運動を洗い直したい、この思いを組織内論議に持ち込んだ。フレッシュアップ委員会を立ち上げて二年間やった。一応こういう運動に変えよう、組織機構はこうだ、を出すんだけれど、組織内へ持つてかえると、なかなか言うことを聞いてくれない。まあ良いことじゃない、くらい。その答申を出し終わった時に、マスコミや学者など外部からも入つてもらつて座長は正村公宏先生にお願ひし、二年間、連合労働運動二一世紀挑戦委員会という組織を作つたのです。九九年から〇一年まで。二〇世紀と二一世紀の変わり目の時。だから二一世紀挑戦委員会。どういう運動をやるか、これを徹底的にやりました。このまとめたものは、第一書林から二一世紀挑戦委員会『連合二一世紀の挑戦』として出版している。

このとき産別の副会長や地方連合の会長の人たちも論議

に参加している。赤裸々に問題点を出している。問題点は全部。そしてじゃあ、こういうことは直さなきゃいけないね、という確認までした。どう直すかというのは突き詰めていないが、二〇〇一年の連合賀詞交換会の時に、「連合21世紀宣言」というのを発表したのです。これはね、A4ペラ一枚物だけどもね、私自身はよく書けていると思います。

この後、〇一年の一月、第七回大会で私が鷲尾(悦也)さんに替わつて会長になった。その21世紀宣言と、挑戦委員会の論議をふまえて、この時に「連合二一世紀ビジョン」として出します。これにね、方向性は入っているのですよ。じゃあその二一世紀ビジョンを具体的に中央、地方、産別がどう展開をしていくのか、これを確かめるために、全国を回つて意見を聞こうと、直ちにやつたのが「アクションルート四七」、四七都道府県を九ヶ月かけて回つたのです。

行つた先で知事、行政の人、地方の経営者、組合員以外のNPO、非正規雇用の人、すべてと対話してくるわけです。帰つてすぐ中央委員会で報告したのは、「自信を持たしてもらつた」ということです。労働運動なんかいらないうつた人は一人もいない。特に雇用がこういう状況になつてきて失業率が5%を超えて高止まりしている、あんな達ががんばらなくて、誰がやるんだ、と激励されたよ、と。連合ががんばらなくて誰がやるんだということに対し

て、やれるような組織に生まれ変わろうじゃないか。

さらに、現実に自分たちのやっていることを普通の人たちや、有識者の人たちがどう見ているのかを検証したい。そのための委員会を作らせよう。するとこれが三役会議で反対されたんですよ。反対されたけれど、会長としてはどうしてもやりたい、と言って頼んで作ることに決めた。

それから委員の選定。中坊公平さん、寺島実郎さん、吉永みち子さん、神野直彦さん、大沢真理さん、それから早房長治さん、イーデス・ハンソンさんの七人の方。最初はね、誰に頼んでも「いやだ」と言う。「労働組合は世の中の役に立ってない」「あなた達は自分たちのことしかやってないじゃないか」。吉永さんなんか「組合なんか嫌いだ」と。しかし、五〇〇万人を超える雇用労働者、当時七〇〇万人の組合員を抱えている、確かに全部ではないが、連合がどう動くかすべてに影響してくる。それが役に立たないと言ったたら解散させますよ、しかし有る以上役に立つような組織にしたいと思うんだ、そのために助言してくれ、で分かったということが集まってもらった。

この人達が、やるよといったらすごいよ、一年半無償奉仕で。現場まで行ってタウンミーティングまでやっていただいた。その上で出してきたのが、『連合評価委員会提言』なんだ。「ここまで言うか」くらいぼろくに言われました

よね、ただこれはね、今いろんなところの人がバイブルにしてくれてるんです。「お前らこんなひどいじゃないか」と書かれている。でも「こうすれば、お前らちゃんと良いことができるよ」というところまで書いてある（『提言』は連合ホームページ「連合について」参照）。

これを受け取ったのが二〇〇三年の八月。それから産別三役、地方連合三役、合同の勉強会をやった。七人の方々も、一泊二日が出てくれて、大論議をした。終わった後、何て言われたと思う？「笹森さん大変だよな、これだけ温度差が有っちゃ。だけど書いた以上はあなたに頼みたい。できればこれを神棚に上げないでくれ」。私はこれを実現するために工程表を作って、一年に一度どうだったかを先生方にフィードバックしながら、自分のライフワークとしてやらせてもらいますと答えた。

それを徹底させるために、〇三年の一〇月の大会でこのことをやるために、俺たちは変わろうよと、連合大会のスローガンを変えるんです。「組合が変わる、社会を変える」。オバマのチェンジより先なんですよ（笑）。

「イエス、ウィキャン」にするために、当時の五八産別と直接対話を提案したのです。アクションルート・パート2。当時の産別の中では、「うちは開かなくて結構だ。現場役員と会長が話をすることは反対します」と、ものすごく

連合「チェンジ」の要は社会運動としての再生

地域組織の再生と地域運動の活性化

いバリアーを張ったところもあった。しかし、いきなりやろうか、と言ったのが電機連合だった。電機でやったことが、ばあーつと拡がって結局五八産別全部に飛び火した。一回やりに行くと、下部組織の東京地協ともやってよ、と拡がっていくのですね。

—なるほど、地域でもやってくれと。

笹森●かける三になった。もう一五〇回以上やったのです。これで、僕は一応労働組合運動の再生・活性化をやらなきゃいけないという思いは、現場役員くらいは持つてくれたかなあと。どうやるかは今後新しい人たちに持つていけばいいだろう、という思いになった

ちようどね、今年の『連合』の一月号に、高木会長と寺島さんの対談が出ている。この中に評価委員会の話が出てくるんですよ。寺島さんは「評価委員会の委員をやらしてもらい、労働運動の再生・活性化に向けて何が必要か、というテーマを与えられて、相当突っ込んだ論議をした」と。これを受けて高木会長は「評価委員会の提言は、まさに連合運動の転換になりました。企業別組合主義から脱却して、すべての働くものが結集できる組織戦略が必要であり、分配の基軸をどうするか、これから打ち立てるべきと強い指摘を受けた、それに対して私はやります」と答えている。だから、大変ありがたいことに、つながってはいる。

笹森●話を戻し、それに見合った連合の組織、あるいは運動をどう取り替えていくか。今度は地域組織、地域の再生・活性化を会長二期目の時に打ち出し、このことを展開していく。連合労働運動が生き返る、生き返ることが社会を変えるのならば、今一番壊されたものは何か。それは、地域社会であり、家族の絆なんです。このことに対して労働運動が無力で良いはずがない。となれば、すべての働く人達に対して運動を提供していくことになる地域に拠点を作らせる。その拠点に対しては、連合は開放する。それから今まで持つている運動のノウハウ、これも全部提供する。そしてネットワーク組織と人材をフル活用する。

その時に、当時はそこまで言っていないが、何がパラダイム転換か。連合が結成された時ベルリンの壁が壊れて、数年後ソビエト共産主義が消えた。帝政ロシアを倒して約七〇年間、実証してきたソビエト型共産主義が間違っていた、ということが立証されたんですよ。そしたら資本主義、自由主義国家が勝ったのかと喜んでいたのも束

の間、去年の九月一五日、リーマンショックによって金融資本主義、これも間違いだということになると、戦後対立してきた二つ、自由主義社会と共産主義社会が両方とも違うぜ、となった時に何を作り替えるのか、このパラダイム転換に結成二〇年の節目に連合はちょうど立ち会うわけですよ。

得難いチャンスだよ。戦後六〇年の対立図式であったイデオロギー、主義主張、思想信条、一回サラにしない、ということを考えなきゃいけない。ところが今これを連合の中に持ち込むと、そんな胡散臭い連中とやれるかよ、あいつら共産党系の組織じゃないか。しかし現実問題として派遣村に象徴されるような貧困問題などにどういう関わり方をしたらいいのかが問われている。

——今こそ、その時ですよ。

笹森●連合会長を降りて三年、ここの組織(労働者福祉中央協議会)に来てから、外部の団体から共闘を申し込まれたのが二つある。一番最初は貸し金問題、クレサラ、例の多重債務高金利。これは日弁連が主体でやってた。それに司法書士会だとか主婦連だとかが参加して展開していたが、らちがあかない。署名集めても三年でせいぜい二〇万筆、運動が拡がらない、政治にもインパクトを与えられない。日弁連と一緒にやってもらえないか、と。我々がかん

で、三ヶ月で二七〇万筆。それを後ろに積んで、国会内の院内集会で全党に要請したら、自民党から共産党まで全部出てきて超党派議連ができ、劇的な貸金業法の改定さ。やつぱり、運動の拡がりや組み方が変わるとこんなもんですかねえ、と日弁連もびつくりした。

——運動なんですよ、やつぱり。運動というのは、動かすんですよ。

笹森●そして二年目に二匹目のドジョウを狙わせてくれた、と単刀直入に來たわけ。二匹目って何よと聞いたら、今度は割賦販売法。これは、おじいさん、おばあさんが騙され、いらぬ布団を買わされたり、地震対策だと言って筋交いをいっぱい打たれて何百万円と取られたでしょう、あの割賦販売法を安心して利用できるクレジット法に変えよう、という運動。しかし、これもいろんな利害関係で、二進も三進もいかないわけ。

ようしこれもやってみようかと。先ず、日弁連、司法書士会、消費者団体のお母さん方引き連れて、都内主要な駅頭一〇カ所で街宣・署名をやった。初めてマイクを持つて人の前でしゃべる、紙に書いてあつてもぶるぶる震えていたのが、だんだんはまってくるんだよね。それから僕らと全く違うなあと思つたのが、署名簿を持つたお母さん達がターミナルで待っている人たちに、ちゃんと話して書かせろわけですよ。これ、すごいんだよ。そういう運動の結

果、これまた劇的な割賦販売法の改正になった。

三匹目で来たのが貧困ネットワーク。一番のポイントは生活保護手当の引き下げ、そして打ち切り問題。これはもう本当に死んじやえということか、ということ、この問題を中心にしなごら、いま格差社会の中で、本当に貧困化、貧困社会というのが一番の問題だ、と。これをどういうふうに助け合えるか、支え合えるかというネットワークを作らないといけない。

ここではちよつと連合批判になるけれど。残念だったのは、この運動体ができて、これに入ろうという時、去年の三月末にシンポジウムをやるのでそこに出席してほしい、で僕は出てもしないで、これは連合が前面に出るべきじゃないかと思ひ、高木会長のところに行かせるのですよ。高木会長「分かった」ということで、初めて「正規社員クラブの親玉です」と言いながらシンポジウムに出た。大好評だった、メディアを含めて。ところが連合の三役会議で、「何であんなところに出たんだ、何であんな奴らとやらなきやならないんだ」。またそれ以降、今度は全国キャラバンを七月にスタートさせ、戻つてきて一月一九日明治公園で集会をするんだけど、連合は出なかつた。

今度の年越し派遣村も連合は前面に出てこなかつた。ぎ

りぎり連合加盟の全国ユニオンがやつてゐるから、まあ連合はそれを支援するという形を取りましよう、ということ、名前を出せたから良かったけれど。結局何故か？ 要するに共産党的なやつ、NPOとか今までの自分たちと違う側にいる、そういう奴と組むというのは組織的に好ましくない、ということになる。

年越し派遣村は社会運動の原点

いま言つたように、六〇年かかつて共産主義も自由主義も作り替えなくちゃいけないというパラダイム転換の時に、今までのことにとらわれてよいの？ 僕はこの二回の運動の中で教えてもらったのは、日弁連の運動の先頭に立つてゐる宇都宮弁護士が、共産党大会や全労連の大会に行つて、「笹森さんがこう言つてます」とか言うのですよね。「同質の協力は『和』にしかならない。しかし異質の協力は『積』になる」。これが実証された三年間だった。今までの塀の中の懲りない面々で、お互いに閉じこもつてゐてはダメだ。世の中を本当に変えていく運動をやるためには、このことをみんなをやつて見ようよと、これがいま連合に求められていることでしょう。

その上で、もう一つ言えば、このことをやつていく場合、最初に言つた組合活動、労働組合運動、労働運動、これ

は社会運動なんだ、というくくりのなかでいうとナショナルセンターは社会運動の担い手になるうということですよ。

この社会運動は今まで四つの運動体がやってきた。一つは農民運動。一つが市民運動。もう一つが学生運動。そして労働運動なんです。このコラボレーションが六〇年安保のあのエネルギーだったし、世界でも未だそういう動きがありますよね。フランスでシャンゼリゼがいつぱいになるような。日本はこれがさつき言った輝ける影響力があった時代の中で、みんなそれが失われてきた。

しかし今のように大きく変質をしてきた中で、同調し、させていくということになると、社会運動の連帯んですよ。これがね、あの派遣村に現れたんですよ。あの派遣村は、NPO、市民団体、そして農民団体、農民運動、そこに三つの労働団体が来たのよ、来なかったのは学生運動だけなんだから。社会運動が久しぶりに日本の中に出現したんですよ。

何故必要になってきたか。これは一九九五年が起点ですよ。何かというとね、前年に千葉の舞浜会議という、経営者の非公式な勉強会が行われた。ここで、アメリカカンスタンドードを軸にグローバリゼーションを日本は進めるべきだ、という派と、いやいや、日本が今まで繁栄してきたのは、日本型資本主義、日本的経営だったじゃないか、これ

を捨てるのは日本が力を弱めるからダメだ、の派が対立する。一方の頭目がオリックスの宮内さん、こつちが新日鐵今井さん。宮内さん達は、雇用構造を転換させることだ、正規から非正規で安いコストにしなさい、いや君それは国賊だよ、のやりとり。結果的に、旧体制派の方が負けるんですよ。これが、九五年に日経連が『新時代の日本的経営』という、雇用ポートフォリオを入れたものを打ち上げることになる。ここに雇用構造の転換があった。

ということは、非正社員比率はいま三分の一。となると、ナショナルセンターは正社員の集まりではあるが、ほとんどが正社員だった場合、大手が決め、ナショナルセンターが決める、それが法律や政策、そして労働条件全部に影響力する。しかし三分の一が非正規になったらそれがブロックされる。だから運動を転換させなければいけない、ということ。これが運動の転換のパートナーです。

二つ目、限界集落を含め少子高齢化・人口減少社会で、労働運動が地域社会の中で関わりを持たないことは、地域を殺すことなんです。地域を生かすために、地域の再生・活性化のために労働運動が、さつき言ったネットワークやノウハウを全部提供していく関わりになればね、地域を支える最大の力になるね。

そのために何をするかというと、地域の活動をやる拠点

を改めて作り直すことだ。これが連合結成の時に忘れてきた地域運動、地方組織を（その時の名残で持っていた地協ではなく）、はじめて連合が新しい役割を持たせ、人的にも金銭的にもカバーする地域組織の強化です。これは、暮らしをサポートする拠点、ワンストップサービスを作ることにしました。これが、「ライフサポートセンター」ということでいま全国一〇六カ所作られたわけです。〇五年からのスタートで、やつと三年。これが本格的に四七都道府県でもっとメッシュのネットワークになっていった場合には、連合の地域運動は地域の中で傑出した存在になると思っています。

派遣法はやはり「原則自由化」の前に一度戻すべき

——派遣法の改正の時期にちょうど連合の役職をやっておられたので、派遣法で一言反省の弁があつたと聞いてますが。

笹森●僕はね、やつぱり九九年の時点、原則自由化の前に一度戻すべきだと思う。

これは、製造業派遣まで含めて全部禁止にしなさいということではない。八五年に派遣法が制定された時、それまでの約四〇年間の日本の歴史を考えていくとね、江戸・明治時代の反省の上から人足口入れ稼業は禁止する、ということになつていた。しかし正規でない働き方をする人たち

が増え始める一番のポイントは、一九七五年の出生率が一・九一、初めて二・〇を割つたこと。女性の社会進出が顕著になつたのが七五年。その社会進出の中で、通訳だとか特殊能力を持った女性の活用はもつときちんとすべきではないのか、それを求める人たちがたくさんいる、ということで専門四業種に限って派遣を認めていこう、これが八五年までの論議だつた。

ところが実際に入る時に一三業種まで拡大をされちゃつた、そこに常用雇用型プラス登録型が入つちゃつた、というろいろの問題があるんだが、社会のニーズであつたことは間違いない。しかし現実には望まなくても余儀なくされている人たちがいるからね、その中で今度は二六業種に拡大をされていく。

それから九九年の原則自由化。この時に労働側は絶対反対だと事務局長として采配をふるつた。残念ながら公・労・使の審議会は労働側が反対をし、仮に両論併記になつた場合、政府側が大体経営側有利の法案を出してくる。これによつて拡大解釈でいかれちゃつたわけだ。その時にじゃあ製造業は当然論議になつた。幾らなんでも製造業現場までは、ということでは止めたけど、〇四年の時には、実態が先に行つちやつたわけだよ、偽装請負を含めて。そういうなら、きちんとした派遣法の中でやつた方が良い

じゃないかと。

——派遣法の中には、労働者保護のために、派遣業者を取り締まる規制条項もありますからね。

笹森●そう、規制があるからというベクトルで、あそこまでも開放した。しかし今考えると、そういう製造業に派遣をしていく場合、どうしても必要な事務系、あるいは技術系の職場の中で派遣をしていく場合に、この働かせ方で持つていく場合には常用雇用型でなければいけない、という方向に作り変えすれば良いんですよ。今これがなつてないところが問題だ。だから一度戻しなさい、と言うと全部禁止なんですかとくるが、僕はそうじゃないよと言っている。

もう一つ言うとな、派遣会社が六万社も有る。ということとは、ピンハネで儲かるからだ。その派遣先と派遣契約をした場合に、派遣会社の取り分と派遣社員との関係を上限規制する、ここが限界なんだと決めさせればいい。

——派遣村で厚生労働省が講堂を開けた、「私がやったんだ」というのがあちこちいますが、本当は笹森だ、という話を伺ったんですか。

笹森●それもまた違う。一つの側面ではあるけれど。派遣村というのは興味深い。あちこちで派遣が切られる、切られるの多いからかわいそうだ、というところで普通は終わる、単発のニュースで。ところがこれは社会問題なんだ

ぜ、という戦略が成功した。だけど派遣村の開村式の時に来た政治家はたったの二人だったのに、ところが、年末年始のニュースでガンガン増えていって、元旦以降はわんざか来るわけです。二日から四日はすごかった。

——私は三二日に行つてカンパしてきました。「小林さん、あの人たちと考え方が違うんじゃないの」と言われましたが、「あれは社会運動だから良いんだ」と。社会運動というのはそういうものでよな。

笹森●そう、「あれは共産党の主導だ」と言う連中がいるけど、政党主導なんてどこにもないんだよ。最後の五日の時に国会前までデモをかける時の先導車が全労連の車だった、というだけの話なんだ。

——結局、社会運動はひとたび燃え上がると、そんなもの乗り越えちゃうんですよ。

笹森●だからあの中に仮に僕がいなかったらそつち系だけじゃないか、となる。だから初日から行つたわけですよ。その時に立っていたことによつて、片側の運動じゃないことが証明され、連合だけでもない、ということも証明されるわけだ。

——いずれにしても、社会運動としての労働組合運動の再生ということが、これからの連合運動の「チェンジ」の柱になる。

笹森●大きなポイントになると思います。